眼の間に2つの横の隆起があり，額にも2つの縦の隆起がある。頭頂にある縫合線の左右の角狀に前出せる部分は孤狀をなして內方に曲がり，急角をなして曲がつてをらぬ。暗褐色の觸角の鞭狀部の第1區は92節から成り，その一部は端に1〜3棘を有し，節は多くも幅と縱が同長で，少なくも著しく幅が廣い。觸角の殘りの部には約100個の節を具へる。第5〜7有氣孔背板及び第15背板の緣は棘が密に並んで鋸齒狀を呈してをる。氣孔鞍は高く膨出す。背板の毛狀物は數が甚だ多く，又甚だしく小さく短かく，三角形で，多くは漸く長さと幅とが等しく，それらの間に微細な孔が散在してゐる。第7有氣孔背板の氣孔はその板の長さの1/3に達する。第1對步肢の跗節第1區の數は29で，前腿節ではその根の方半部に多くの大いに長い刺毛を生ずるも棘毛を有せぬ。第4對步肢の跗節第1區は20，前腿節は多くの刺毛の外に，少數の棘を有し，脛節は下方に棘毛を散生す。第7步肢の跗節第1區は18節から成り，前腿節は第4步肢に似，脛節の上面は棘毛が密に鋸齒狀に並び，下面には散生し，跗節第1區には多くの棘毛を有す。雌の生殖肢端肢の兩根節は互に端の方へ擴がるも餘り甚だしくない。間隙の兩內側はやゝ並行に近く兩內側間の幅は各分離部の端の方の幅の1.5倍。癒合部の縱長は分離部の1⅓，分離部と第2節の長さは殆んど相等し。肛門下板の上緣と下緣とは並行　後緣は上より下へ斜になつてをる爲に後端が三角形となつてをる。

分布：沖繩島洞穴。

蠍　　襍　　記*

高　島　春　雄

東京文理科大學動物學教室

§ サソリの和名

サソリは現世産は600種を超えるといふのに從來日本の學者の眼に觸れた種類は僅少に過ぎぬせいか，和名を持つものはどれ程も無い。次に掲げるものが恐らく其の全部であらう。和名に命名者を附記してないのは總べて岸田久吉氏所命である。

Babycurus buettneri Karsch, 1886　キアカサソリ
Buthus caucasicus (Nordmann, 1840)　カウカサスサソリ (東京科學博物館)[1)]
B. martensii Karsch, 1879　キヨクトウサソリ (異名　ツクシサソリ　岩川友太郎氏)
B. occitanus (Amoreux, 1789)　シロザソリ
B. przewalskii Birula, 1897　ムギワラザソリ
Chaerilus pictus (Pocock, 1890)　オホクシヲレザソリ
C. truncatus Karsch, 1879　クシヲレザソリ
Euscorpius carpathicus (Linnaeus, 1767)　クロヒメサソリ (東京科學博物館)[1)]
Heterometrus cyaneus (C. L. Koch, 1836)　アヲザソリ
H. longimanus longimanus (Herbst 1800)　チャグロサソリ
H. longimanus silenus (Simon, 1884)　カネグロサソリ
Isometrus europaeus (Linnaeus, 1758)　マダラサソリ (岩川氏)
Iurus dufoureius (Brullé, 1832)　アカサソリ (岩川氏)
Liocheles australasiae (Fabricius, 1775)　ヤヘヤマサソリ (岩川氏)
Lychas mucronatus (Fabricius 1798) ヒノモトサソリ (高島) (異名　ヒレザソリ)
Microbuthus pusillus Kraepelin, 1893　チビサソリ (高島)
Pandinus imperator (C. L. Koch, 1842)　ダイワウサソリ (高島)
Prebabycurus centrurimorphus (Karsch, 1886)　スヂキサソリ
Scorpio maurus Linnaeus, 1758　コガネザソリ
Scorpiops affinis Kraepelin, 1898　ゴマヅキコグシザソリ
S. hardwickii (Gervais, 1844)　コグシザソリ
S. petersii Pocock, 1893　キアシコグシザソリ
Zabius fuscus (Thorell, 1877)　ウスチャサソリ

§ 東京女高師所藏チャグロサソリ

久米又三教授の御芳志により東京女高師動物學教室所藏の大きいサソリ標品1個を檢するを得た。フォルマリン漬でラベルには「オホサソリ　不詳」とある。調査の末これは矢張りチヤグロサソリ(成雌)と判つた。此の標品で目立つのは體が著しく黄褐色を呈してゐることで觸鬚を除けば體の上面も下面も黄色味が

---

* 東亜產全蠍類脚鬚類の調査 (其の八)。(其の七)「山西省產全蠍目」は未だ印刷せられず。

1) 東京帝室博物館時代の標本臺帳に之等の名が載つて居る由であるからどなたの命名か判らぬが相當古くからある呼稱である。

頗る強い。併しチャグロサソリとしての標徴を十分具へてゐるし，幸にも此の標品は來由が明かになつたので保存液の爲の變色なることを確かめ得た。斯う變色した爲の一つの發見は黄味の强い黄褐色になつた歩脚には第3節端と第4節端に小黑褐色斑が顯著に認められることである。フォルマリン漬で硬くなつてゐて滿足な計測は出來ぬが，背甲長16粍(前葉端から測れば18.5)前腹長27＋x後腹長56＋x，櫛狀器齒數は右17枚左16枚である。

偖此の標品は齋藤諒次郎氏より貰ひ受けたものだとのことで齋藤氏に右標品を示し當時の記憶を辿つて戴いたら面白いことが判つた。日露戰爭後（明治40年頃ならん）氏の伯父に當る御方が香取丸の船長をしてゐて印度洋のどこかの港で生かしりに來たのを買ひ，齋藤氏はお土産としてそれを貰ひ東京で1箇月位飼育してゐたがその內斃死した（容器の底に砂利を敷き蠅をやつてゐたといふ)。爾後標品として手許に置かれたが大正12年の震火災後東京女高師の標品として提供された（當時の教授岩川友太郎氏)。それが今日まで保存されてゐる譯である。生時の色は黑光りがして美しく現在の色調とは全く相違する旨を同氏が證言して下さつた。此の標品が今日の南方共榮圈のど

第1圖 泰國產サソリ．チヤグロサソリかカネグロサソリの♀．何れにしても種は *Heteromctrus longimanus* である．實大〔鳥羽源藏氏寄贈寫眞〕

こかの產であることは確かである。

江戶時代に蠍は時々舶來し當時の本草家や好事家の手に入つたことはその頃の刊本の記事や寫生圖（後項參照）から明かであるが，夫等は大抵キヨクトウサソリ，マダラサソリ等の如き小さい種類であつた。然るに江崎悌三博士の御指示に據ると栗本瑞見の「栗氏蟲譜」[2] にサソリは3種圖示され，その內の一つは說明に「咬𠺕吧產　蠻名スコルピユン　奇品」とあり色は赤いが大きさや形から見て *Heterometrus* なることは疑無い由である。咬𠺕吧（カラッパ）は元來椰子をいふ馬來語であるが妙な經緯からジャワの古名になつた。併し此のカラッパから「栗氏蟲譜」に圖示された標品の產地を直ちに今日のジャワ島と考へることは危險である。ジャワにゐる大きいサソリはアヲザソリ *Heterometrus cyaneus* で此のものは Kraepelin に據る時は體色は「栗褐色，黑褐色乃至暗綠色」とあり *cyaneus* の學名，アヲザソリの和名が通用するものではないらしい（尙チャグロサソリにも暗綠色の光輝を持つ個體がある）。ジャワのみならずスマトラにもゐる。ジャワでカトゲンと呼ばれるのは本種である。私は殘念ながらカトゲンの標品を未だ調べたことが無いが，文獻に徵するにチャグロサソリに似たものではあるが紛れることの無

第2圖　平賀鳩溪の著に出て居るサソリの圖〔本圖以下第7圖まで總べて江崎悌三博士の御好意に據る〕

2) 此の書は刊行されず。原本は大正12年9月の劫火に燒失し，寫本のみ數部傳はる（江崎氏より伺ふ)。數百種の廣義の蟲類を精密に寫生し着彩し說明を附したものである。寬政6年に發足して18星霜を閱し文化8年に成つたものであると云ふ。

い別種である。「栗氏蟲譜」のものがアヲザソリかチャグロサソリであることは疑無い。それは偖置き内地でチャグロサソリの如き大形種を飼育した人は無かつたと想ふ。齋藤氏が内地で1箇月程も飼はれたのは注目に値することである。

第3圖 岡元鳳の著に出て居るサソリの圖．アヲバイの文字と“サソリ”に施した傍線は朱の書入で本來あつた文字ではない．

§ 海南島産全蠍類追記　第二

海南島産の蝎に關しては（其の一）及び（其の五）に於て既に述べた。之までにヒノモトサソリ成幼共41頭，マダラサソリ1頭を檢したのである。今年になつて畠山久重氏の御芳志で乾品になつた同島産サソリ（種類はマダラサソリ）を1頭檢するを得た。海南島三亞で小林勇吉氏が入手し畠山氏に送つて來たものである。平坂恭介教授が「海南島の動物概觀」（1942）の第II圖版に示されたサソリの圖は説明に「サソリ *Isometrus maculatus*. 海南島藎園にて田中亮君採集」とあるけれども恐らくヒノモトサソリであらう。

§「八重山産全蝎目及脚鬚目」[3] 追記

今年になつて高桑良興氏のお手許に紛れ込んでゐた琉球八重山産サソリ及びサソリモドキ標品各1瓶を見つけ出した。前者は乾品になつたマダラサソリの♂でラベルには八重山郡竹富村とある。山階芳麿侯御派遣琉球列島生物調査隊の採品たるは先づ疑無き所であるが採集年月日，採集者などは判らなくなつてゐる。サソリモドキの data は次の如きものである。

p. No. 335　1♂5♀♀ 2幼　1936年4月1日　石垣島白保　山階侯御派遣第二次琉球列島生物調査隊採集（岡田彌一郎，洞澤勇，池田兵司氏等）

第4圖　藤元良の著に出て居るサソリの珍圖

§ 江戸時代の文獻に現れた蝎の圖

1　寺島良安（正徳3年）和漢三才圖會　卷五十二蟲部

全蝎の條に畫がある。昆蟲様の複眼や觸角が見え肝腎の觸鬚は明瞭でなく八脚の昆蟲といつた感じで出來榮宜しからず。

2　平賀鳩溪（寶暦13年）物類品隲（ひんしつ）　卷之五

「蠻産蠆」として明かにマダラサソリ（それも♂）と思はれるサソリの全形を背面と腹面とで示してある。併し歩脚は3對しかないやうに見えるのはどうしたものであらう。本文中には「蠻産長尾ノモノ田村先生長崎ニ至テ紅毛商船中ニ生ズルモノヲ得タリ數十日不レ死死シテ後藥水中ニ蓄フ其状圖中ニ詳ナリ」とある。源内の師田村元雄が飼育したものであらう。サソリが積荷などに隱れて船舶により甲地から乙地に齎される1例證が「長崎ニ至テ紅毛商船中ニ生ズルモノヲ得タリ」から得られる。

3）（其の一）に出づ。

3　淵　在寛（安永8年）陸氏草木疏圖解　卷四

2頭共歩脚と觸鬚とは明瞭に描き分けられて居るが腹端が卷鬚の如く終つて居る妙な蝎で，複眼様の眼も正しい觀察ではない。此の書は次の「毛詩品物圖攷」と同様詩經の品物を考證したものである.

4　岡　元鳳（天明5年）毛詩品物圖攷　卷六

サソリの條に2頭背面を示してある。觸鬚を第1歩脚と誤認した爲眞の歩脚は3對しか描かれてゐない。前腹部と後腹部との境界の判然しない所も珍である。

5　藤元　良（寛政9年）和蘭産物圖考　卷之一

ジャ虫の條に蘭船甲板上に長烟管を持つた蘭人に2頭のサソリを配した面白い圖が出てゐる。此の圖のサソリはマダラサソリらしく見えるが「親しく見るところを以圖する也」と本文にあるのに人物と比較すると1尺位もある。此の矛盾はどうしたものかと不審に思ふのである。

第5圖　淵在寛の著に出て居るサソリの圖

6　栗本瑞見（文化8年）栗氏蟲譜

全蝎として3種圖示されてある。その一は明かにキョクトウサソリで「享保中予實父藍水翁[4]瑪浦[5]ニ遊ヒテ此物ヲ蠻船中ニ得タリ活存スルコ數十日ニシテ不死々後藥水中ニ蓄フ今ニ於テ珍藏ス新ニ採得タルモノヽ如シ」とある。昆蟲の複眼様の眼が畫かれ大腮も眞相を傳へてゐないのは惜しいことである。第二は

4)　田村藍水は栗本瑞見の父に當る。

5)　ニウラで長崎の古名である。

前項に說いたもので♀と思はれる。第三はマダラサソリの♂で「享保中船來藥水浸貯者」とある。本蟲譜のものは以上の諸例中では寫生最も巧緻ではあるが併し尙もう一息の感がある。

以上6例の他にも色々あらうが私は未だ覽る機會を持たない。

第6圖「栗氏蟲譜」に出て居るサソリの圖(其の一)

第7圖「栗氏蟲譜」に出て居るサソリの圖(其の二)

編輯者と印刷所と双方の手ぬかりから此處にポカッと空間を生じて仕舞つたので穴埋めに片桐（鈴木）三樹氏遺稿「蜘蛛」なる書物の御紹介をする。「蜘蛛の研究」の著者湯原淸次氏は若くして逝かれたが片桐氏も之からといふ所で病魔に阻まれ長い闘病生活の後昭和7年8月12日逝去なされたのである。信濃教育會下伊那部會で其の遺稿を纏めて出版したのが上記の一書であるが，謄寫印刷とは申しながら131個の圖は悉く原色で其の凝り方に感心させられる。昭和9年の出版かと想ふが一般には行き亙らず本會會員諸兄で未だ御存じない御方が多いであらう。私は此の書のあることを知つて居たが今日まで入手の機會が無かつたのを最近偶然購求するを得た。取つて披いてみると卷頭に著者遺影を掲げ下伊那部會長の序文があつて本文に入り「下伊那産蜘蛛類目錄」「下伊那産眞正蜘蛛類科ノ檢索表」「下伊那産眞正蜘蛛類通俗檢索表（豫報）」を經てヂグモ以下各種の圖說に入る。之等の圖は原圖を謄寫印刷屋が巧妙に模したものであるから多少趣が變つて來たであらうことが想はれる。著者に判らぬ種類は金子光司氏或は東京の岸田久吉氏に鑑定を乞うて居られたさうである。瑕瑾はあるにしても著者としては最善を盡されたであらうから其の御努力に深き敬意を捧げ，長野縣出身の數ある蜘蛛學者の一人として氏の名の永く記憶せられんことを祈るものである。

アシダカグモ *Heteropoda venatoria* Linnaeus の生活史に就いて（上）

關口晃一
東京文理科大學動物學教室

內容目次